ドゥグ

ガリフナの祖霊信仰

発端は、災いがつづくことだった。祭司はその原因が、祖先の霊の怒りであるという。そこで、祖霊をこの世に招き、もてなし、願いを聞き、送り帰す儀礼がおこなわれた

冨田晃（写真家）

中央アメリカ、ホンジュラスを中心として、カリブ海沿岸に住むガリフナに伝わる信仰儀礼のなかで、ドゥグはもっとも規模が大きく厳格かつ神聖なものだ。ふだん別れて暮らしている親族が一同に集まり、聖殿ガユネイを建て、歌い、踊り、食事を捧げ、そしてともに眠る

ガリフナの「死」の文化

中央アメリカのカリブ海沿岸に住むガリフナの宗教はアフリカ、カリブからもちこんだものにキリスト教カトリックをも習合し、展開させた独自なものである。また、ガリフナにとり、死とはすべての終わりではなく、来世への始まりなのである。そのため、祖先の霊には深い敬虔の念をもち死と死者の霊に関わる各種儀式が、とてもたいせつにおこなわれている。

ガリフナの村では、人が死ぬと葬儀はキリスト教カトリックのしきたりにならい、死者の自宅でベロリオ（通夜）がおこなわれる。家族親類そして村びとたちが集まり死者を懐かしみ、思い出を語りながら一晩じゅう遺体とともに過ごす。翌日、教会で別れのミサをおこない、村の一角にある墓場に土葬される。死は、家族親類そして村の人たちにとって悲しく辛いことであり、この葬儀は悲しみのなかでおこなわれる。

そして、葬儀が終わると残された家族親類たちによりプンタが準備される。プンタとは現世をまっとうし、苦しみから解き放たれた死者の来世への復活を祝う儀式である。プンタは死後九日目のノベナリオという死者に別れを告げる儀式とともにおこなわれたり、死後、数ヵ月から一年ほどたっておこなわれる。

プンタ当日は友人や村の人びとを死者が生前住んでいた家に招き、死者の人形とともに一晩じゅう踊りあかすのである。人形は死者が使っていた衣服や靴、眼鏡などを身につけた等身大のもので、その顔には丸いヒョウタンの実が使われている。そして、死者が男性のときには木片で男根がリアルにつくられ、服に隠してつけられる。

こうして死者は来世に復活することができる。祖先の霊が住む来世と現世はつながっており、祖先たちは来世から現世の子孫たちをみまもっているのだ。

夢にあらわれた祖先の頼み

発端

一九九四年の七月。中央アメリカ、ホンジュラス共和国のコロサル村で、ガリフナに伝わる祖霊信仰の儀礼ドゥグがおこなわれた。ドゥグとはガリフナたちに伝わる数ある信仰儀礼のなかで、もっとも規模が大きく厳格かつ神聖なものである。ドゥグは親族単位でおこなわれる。このときのドゥグは故人となった特定の祖先の子孫たちによりおこなわれていた。また、儀礼をおこなうには莫大な費用がかかるため、ふたつのことなる親族集団が合同でドゥグをおこなうことがおおい。このとき

冨田晃「ガリフナの祖霊信仰」『季刊民族学』73,pp.59-73,1995

←ミサでは祈りを捧げたあと、アバイマハニやプンタ、クリオウなど数々の踊りが、一晩じゅうつづく。ミサをはじめガリフナの行事は女たちが中心だ

↓死者に別れを告げるペロリオ。一晩じゅう、友人たちが死者の思い出の数々を語りあかしていた

↑各家族で数年に一度、死者の冥福を祈るミサがおこなわれる。死者の家族や仲間たちが村の集会場に集まり、聖書の一節を読み、祈りを捧げたあと、食事が振舞われる

←来世の復活を祝う儀式プンタでは、死者の衣服や靴、眼鏡などを身につけた等身大の人形がつくられる。死者が男性のときには木片で男根がリアルにつくられ、服に隠してつけられる。そして女性たちは、それを親しみをこめてチラッと覗く

のドゥグではガルシア家とエレラ家によりおこなわれた。

ガルシア家がこのドゥグを開くことになったきっかけは五月はじめのある日、娘イサの夢のなかに彼女の祖母エバがあらわれたことだった。しかしイサの祖母はイサが生まれる前に亡くなっており、イサは祖母の顔を知らないのである。イサは夢のなかで一人の老婆に会い、自分のためにミサを開いてくれと頼まれたという。老婆は次の日も、また次の日も夢にあらわれおなじことを頼んだ。イサはうなされ寝つけぬ日々を過ごした。イサは夢のなかに出てくる老婆のことを母親フアナに告げた。イサが語る老婆の体恰好、目鼻立ち、そして話ぶりからその老婆はフアナの母親、つまりイサの祖母エバであることを知った。

いっぽう、フアナは足を悪くしていた。数カ月前からすねが膨れあがり、ときおり出血していたのだ。病院にも行ったが病名も原因も

わからなかった。フアナはここ数年エバのためにミサをあげていないことを思い、そのために自分の足が悪くなったのだと考えた。それから一〇日後フアナは近くに住む姉妹たちを集め、母エバの霊を慰めるミサを開いた。

ガリフナたちの祖霊信仰におけるミサとは、死者への供養のためキリスト教カトリックの教会で神父による礼拝を受け、その後、死者の家族が村の集会場で村びとたちに食事を振舞い、太鼓やマラカスとともに一晩じゅう踊りあかす儀式のことである。

フアナには二人の姉と妹が一人、そして兄が一人いる。フアナの兄とその家族は一〇年ほど前から、アメリカ合衆国のニューヨーク市に移住していた。フアナはミサを開き、足の回復を願った。しかし足の痛みはさらに激しくなり出血もひどくなった。ニューヨークの兄が自動車事故にあったという知らせを聞いたのは、ミサが終わった数日後だった。フアナはとなり町のトゥルヒーリョに住むブジェイ（ガリフナの祭司。六三ページ囲み記事参照）のジョウバにすべてをうちあけ、相談した。それによると母エバの霊は、ニューヨークに住む息子チャベスがミサに出席していないことにいらだっているのだという。そしてドゥグを開きエバの霊をよび寄せ、その願いをかなえなければ、さらに悪いことがエバの子孫たちのなかでつづくという。

さらにニューヨークに住む家族のなかでも、フアナの兄の事故以前からエバの夢をみる者がいて、ニューヨークのブロンクス地区に住むガリフナの女性ブジェイにそのことを相談していたのだった。

こうして、ホンジュラスとアメリカ、ニューヨークに住むそれぞれの家族とブジェイのあいだで連絡をとりあい、兄の怪我の回復を待って、二ヵ月後の七月一九日から四日間、

冨田晃「ガリフナの祖霊信仰」『季刊民族学』73,pp.59-73,1995

聖殿ガユネイはヤシの丸太と葉でつくられる。ヤシを近くの山から切りだし、川を丸木船で運ぶ

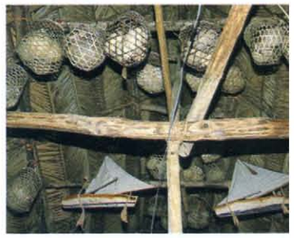
【ドゥグと村びと】

ドゥグはふたつのことなる親族集団が合同でおこなうことがおおい。本文にしめしたドゥグでは、それぞれの特定の祖先と血縁的につながる子孫たちによりおこなわれていた。それぞれの親族集団はいくつかの世帯にまたがっていたが、婚姻により、外部の血族からつながるものはこの集団には参加せず、ほかの村びとたちとおなじように協力者としてかかわっていた。また、ドゥグにかかわるいっさいの負担は、この親族集団によりまかなわれる。

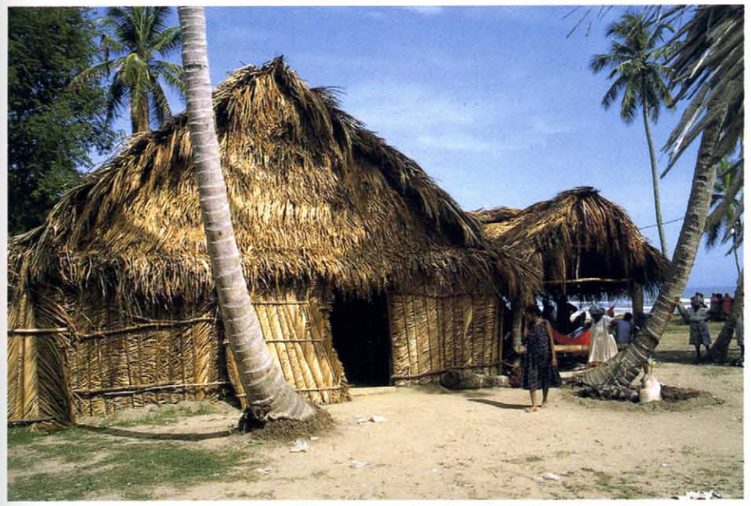
ドゥグは対象となる親族のほか、おおくの村びとたちの協力によりおこなわれる。本文にしめしたドゥグでは、親族以外に二〇名以上の村びとたちが協力していた。男たちはガユネイ建設やブタの解体をし、四人の漁師が祖先の霊に捧げる魚をとる。女たちは参加者全員への食事をつくる。

村びとたちはマリやアバイマハニ、アウマハニには参加するが、親族とはことなり、ドゥグの当事者ではないので、服装も自由で、ドゥグの全行程に参加する義務はない。さらに、ドゥグを信じていない村びとはガユネイに近づくことも許されない。

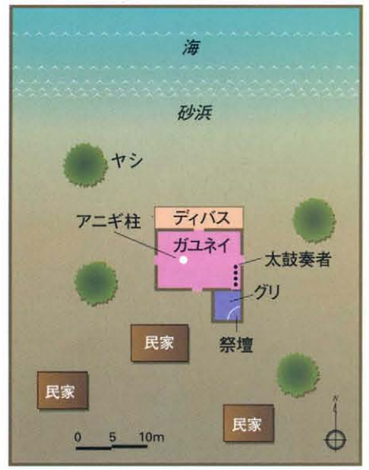
近隣の村むらからは、ドゥグをおこなうそれぞれの親族あてに代表が派遣され、ブタやニワトリ、ラム酒、現金などが贈られる。



→ガユネイの天井にはドゥグに参加する親族の数だけの、篭が吊るされ、なかには干し魚やカッサベ（マニオクイモからつくるせんべい状の食べもの）などがはいっている。また、ドゥグに参加するそれぞれの親族の姓が記された船型も吊られている



海辺に聖殿ガユネイが建つ。ガユネイの海側にはディバスとよばれる休憩所が、山側には祭壇のあるグリとよばれる小部屋がつくられる。これらはドゥグが終わったあと、廃屋として放置される



エバが生まれ育ったホンジュラスのコロサル村でドゥグが開かれることになった。

いっぽう、コロサル村とトゥルヒーリョの町に親族のおおくが住むエレラ家でも、災いごとがつづいていた。火遊びが原因でエレラの家が燃えたのは、一九九三年の一一月のことだった。ブジェイ、ジョウバに相談したエレラ家では、何年か前に亡くなったおじいさんの怒りのあらわれで、早急にドゥグをおこなうべきだといわれたが、エレラ家では災いのあとでもあり、金銭的に都合がつかず、またエレラ家のなかにはドゥグの効果を信じない者もいて、そのときはドゥグをおこなわなかった。

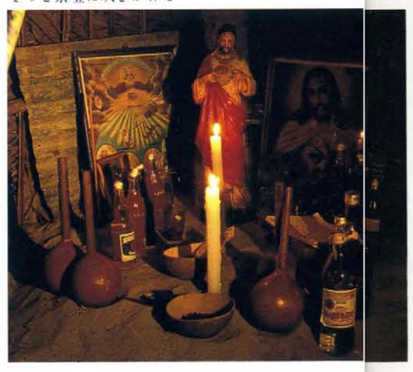
一九九四年四月にトゥルヒーリョ近くの村に住むエレラ家の娘が、マニオクイモの畑で野良仕事をしていたとき毒蛇にかまれた。彼女は村びとたちにより、ブジェイのジョウバのもとに担ぎこまれた。ジョウバは彼女の傷に口をあて毒を吸い取り、薬草の葉をあて、アニス（セリ科の草）の実、コショウ、ニンニク、クアコ（マニオクイモからとれるデンプン）などを浸したラム酒を彼女に飲ませた。ブジェイは薬草の扱いにたけた民間医療師でもある。

彼女の怪我はいったんは治ったようにみえたが、何週間かしてまた傷口が腫れてきた。ブジェイであるジョウバは、「この災いはエレラ家がドゥグをやっていないから、おじいさんの霊がまだ怒っているからだ。ドゥグをおこなわなければさらに災いがつづくだろう」と告げた。

エレラ家のおとなたちが集まり、ドゥグを開くことを決めた。エレラ家ではドゥグの経費を減らすため、ほかの親族がドゥグをおこなう機会を待った。そしてエレラ家が相談しているブジェイのジョウバにガルシア家もまた相談にきたのだった。こうしてエレラ家とガルシア家は共同してドゥグをおこなうことになった。

↑ガユネイの中心には聖なる柱アニギがたち、その元には、それぞれの親族のムアが置かれる。ムアとは土にラム酒、ビール、コーラなどをまぜて固めたもので、灯明と食事が捧げられる。ブジェイはムアの変化をみながらドゥグが無事進行しているか知る

↓祭壇にはキリスト像が祭られ、マラカス、ラム酒、薬草などが供えられている。ブジェイは、ドゥグの間の各儀式の始めと終わりにロウソクに火をつけ、タバコをくゆらせ、そっと祭壇に吹きかける



【ブジェイ】

ブジェイとは、神キリストと交信する特別な能力をもち、ガリフナのさまざまな信仰儀礼を司る祭司であり、それを職業にしている。ブジェイは儀礼の依頼主である親族から報酬を得るとともに、それに関わる経済的な出入のいっさいを管理する。

またブジェイは自然薬や民間治療に通じる民間医療師でもあり患者に薬草を処方し与え、そのみかえりをえる。人びとからの信頼度も高く、医療のほか占いなどをおこない、人生におけるさまざまな相談にのる。

ブジェイ社会は徒弟制で一人の長がすべてをしきり、指示を発する。男性のブジェイのほうがおおいが女性のブジェイもいる。ブジェイはこれからブジェイとなる若者が神キリストのお告げでどこにいるか知り、捜しだし、弟子として入門させる。

現在、ホンジュラスに住むガリフナのあいだに五〇～六〇人のブジェイがいて、約一五のグループにわかれているという。

聖殿ガユネイが浜辺に建てられる

準備

ドゥグが始められる一〇日ほど前に、このドゥグを取りしきることになるブジェイのジョウバが二人の弟子を連れ、太鼓やさまざまな儀礼道具、砂糖や小麦粉など大量の食料、ケース単位のラム酒、ビールなどとともにトゥルヒーリョの町からバスを借りきり、数時間離れたコロサル村につき、準備が始まった。

会場となる聖殿ガユネイが、ブジェイの指揮のもと、村びとたちの協力を得て建てられる（六二ページ囲み記事参照）。ガユネイはヤシの木と葉でつくられる短辺八メートル、長辺が一二メートルほどの長方形の建物だ。内部は土間で、中心にはカシの丸太の神聖な柱アニギがたつ。アニギには薬草の汁からとった色素で十字が描かれる。そしてアニギの元にはムアが置かれる。

ムアとは土にラム酒、ビール、コーラなどをまぜて固めた長さ三〇センチ、高さ一〇センチほどのドーム型のものである。これはドゥグに参加するそれぞれの親族のためにブジェイによってつくられる。ムアの前にロウソクが立てられ、朝昼晩と食事が供えられる。ブジェイはムアの変化をみながら、ドゥグが無事進行しているか知ることができる。つまりムアのひびや割れは祖先の霊の怒りをあらわしているのだ。

ガユネイの四方に立てられたそのほかの柱はヤシの丸太で、それぞれの柱の根元には夜になると発光するという石が埋められている。この石には人びとがもつ邪悪な精神がガユネイにはいることを拒む力があるのだという。

冨田晃「ガリフナの祖霊信仰」『季刊民族学』73,pp.59-73,1995

ガユネイの四方を包むヤシの葉でできた壁の中心には出入口がつくられている。これは人びとの出入口であるとともに、祖先の霊の出入口でもあるので、ここで立ち止まることは厳禁されている。

ガユネイの天井にはドゥグに参加する親族の数だけ、竹で編まれた篭が吊られる。その篭のなかには干し魚、カッサベ（マニオクイモからつくるせんべい状の食べもの）、ヒカケ（水を飲むために使う木の実でできた椀）がはいっている。そしてガユネイのなかほどの天井からは、木でできた丸木船の模型が、ガルシア家、エレラ家とそれぞれドゥグに参加する親族の姓が記され吊られている。またこの船型にはアチョテという薬草からとる染料で朱色に染められた帆が張られている。

ガユネイの南側、つまり山側には（ガリフナの村々はカリブ海沿岸にあり北に砂浜、南に山がある）グリという四メートル四方ほどの小さな部屋がつくられ、カーテンで仕切られている。この部屋にはいることができるのはドゥグを司るブジェイたちとブジェイに許されたごく一部の者だけだ。

グリの一角には砂が敷かれ、キリスト像、マリア像の前にロウソクが立てられる。さらにマラカス、パイプタバコ、ラム酒、ビール、コーラ、ドゥグに参加する親族たちすべての名前が記された紙、ドゥグで出入りするお金を入れたヒョウタンのお椀が供えられている。ガリフナたちの一方のルーツである、カリブ海の先住民たちが祖先の霊への捧げものとして、タバコやマラカスを使っていたのだ。

グリは倉庫としてドゥグの期間中に使われる。大量のラム酒、ビール、砂糖、小麦粉などが積まれる。ブジェイはこのグリに寝具をもちこみ、寝泊まりをする。

ガユネイの北側つまり海側にはディバスとよればる、壁のないヤシの葉葺きの屋根だけの部分がつくられる。ここには腰かけになるよう低い位置にヤシの丸太が渡されている。また、天井からはいくつものハンモックが吊るされ、休憩場として使われる。ハンモックもまたカリブ海の先住民が寝具として使っていたものだ。

ドゥグが始まる二日前、アメリカに移住していた家族たちがニューヨークに住む女性ブジェイとともにコロサル村に着いた。このドゥグに参加者した親族は七二人。ガリフナの女性はおおくの子を生むため、直系の血族の数が増える。ガルシア家三二人、エレラ家四〇人だ。しかし親族であっても子どもと生理中の女性の参加は認められない。ブジェイは合計四人。トゥルヒーリョの町からきた二人のブジェイにニューヨークからきた女性ブジェイを加えて、このドゥグはとりおこなわれた。

参加する親族たちは各人、生きたニワトリを一羽ずつ祖先の霊への捧げものとしてもってこなければならない。七二羽のニワトリがガユネイのあちこちにひもで縛りつけられる。さらに、それぞれの世帯ごとに一頭ずつのブタもいけにえとしてもちこまれる。ガルシア家五頭、エレラ家七頭のブタがガユネイの近くのヤシの木に縛りつけられる。こうしてドゥグがはじまった。

徹夜で漁をしていた漁師を迎える

一日目早朝

ドゥグ第一日目の朝、午前四時ごろ。ブジェイはグリにある祭壇にロウソクの火を灯し、パイプでタバコの煙をくゆらせる。イエス・キリストにドゥグの始まりを知らせ、その成功を願うのだ。

そしてドゥグの会場となるガユネイが、ブジェイによりつくられる聖水で清められる。この聖水は祭壇で祈りをささげられた水に、リナという亜麻科の植物の葉のエキスが絞りだされ、さらに樟脳、レモン、硫黄が加えられたものだ。それをガユネイの内と外から壁際の地面へとかけていく。とくに祖先の霊を迎えるガユネイの出入口と、太鼓が演奏される東側の壁近くはていねいに清められる。

次にブジェイにより太鼓が清められる。ドゥグに使われる太鼓は四つ。四人の太鼓奏者たちは、太鼓ともにガユネイの壁にそって並ぶ。香炉にコメヘンというシロアリの巣とセンダングサ（キク科）の葉を焚き、ブジェイが差しだすと、太鼓奏者は太鼓を香炉にひとときかぶせる。つぎにタバコの煙りそしてラム酒がブジェイの口から太鼓内部に吹きかけられる。太鼓が清められると太鼓奏者一人一人の頭にラム酒を吹きかける。そして太鼓奏者は太鼓を植物の蔦で体の前に止める。

ガユネイ内部にはドゥグに参加する親族たちが、片手にラム酒の瓶を、もうひとつの手にロウソクをもち、集まっている。ラム酒の瓶は開けられ、その口には、綿がつめられている。

ドゥグに参加する親族たちはみな、アチョテという草の実からとった朱色の染料に染められた衣装を着ている。男性は丸首シャツに半ズボン。女性はブラウスにスカートだ。そして男女とも赤いスカーフを頭に巻いている。個人的な香水や指輪などの装飾品をつけることは許されない。

ブジェイはガユネイ、太鼓、太鼓奏者の順で清めると、空が白み始めるのを待ち、グリの祭壇に供えられているマラカスを手にガユネイのなかに人びとを集める。

太鼓奏者四人とマラカスをもったブジェイ四人が向きあう。ブジェイが鳴らす「シャン、シャン」というマラカスの音を合図に「トン、ドン、ドンドット」と太鼓が鳴りだす。親族たちは体を左右に揺らし、踊りはじめる。そしてしばらくガユネイのなかで踊りつづけたあと、マラカスをもったブジェイと太鼓奏者たちを先頭に、ガユネイの外に出る。そして火のついたロウソクとラム酒をもった親族たちは海岸まで踊り歩いていく。

こうしてドゥグの開始を告げるアドゥガハニという儀式が始まる。カリブ海で前日の夜から一晩じゅう、祖先の霊への捧げものである魚をとっていた漁師たちを、浜辺で迎えるのだ。

沖では漁師たちが丸木船に乗り上陸を待っている。この船にはマストのような飾りがヤシの葉でほどこされている。朝日が昇る。マラカス、太鼓、歌声が高らかに響く。漁師たちを乗せた船は、皆が待つ海岸へと上陸する。

波打ち際に丸木船が着くと、一人の少年が、砂浜で待ち受けていた青年にたいせつに抱きかかえられ、そのまま走り連れ去られていく。この少年はドゥグをおこなう親族のなかから選ばれ、前夜、漁師たちとともに海に出ていたのだ。少年は漁の疲れを癒すため、まつ先に休憩所ディバスに掛けられたハンモックに寝かされる。

つづいて四人の漁師たちが丸木船から降りてくる。それぞれヤシの葉で体を飾っている。海岸で、親族たちが魚のはいったたらいや船を漕ぐかいをたいせつに受け取る。この魚はのちにアダダグニという儀式で料理され祖先の霊に捧げられる。

踊りつづけ、祖霊のおとずれを待つ

一日目

アドゥガハニが終わり、人びとは、漁師たちを先頭にガユネイに戻ってくる。そしてそれから三日間、音楽と踊りにより陶酔状態には

ドゥグの開始を告げるアドゥガハニ。朝日が昇るなか、マラカス、太鼓、歌声が高らかに響く浜辺に、一晩じゅう魚をとっていた漁師たちをのせた丸木船が上陸する

←〈右〉丸木船が波打ち際に着くと、少年が1人、たいせつに抱きかかえられ、そのまま走り連れ去られていく。この少年は親族のなかから選ばれ、前夜、漁師たちとともに海に出ていた

←〈左〉少年とヤシの葉で身を飾った4人の漁師が、休憩所ディバスに掛けられたハンモックで漁の疲れを癒す

いり、祖先の霊と交信をするマリをほとんど不眠でつづけることになる。

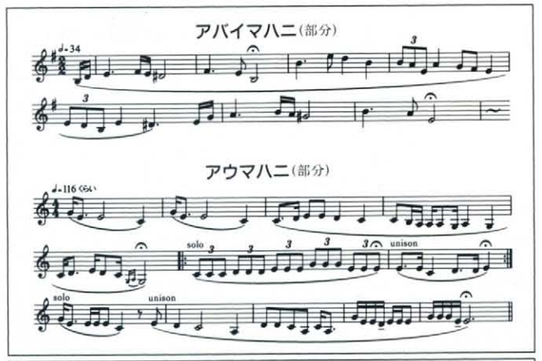
マリではブジェイがマラカスを激しく鳴らし、太鼓が低く鳴りつづける。そして人びとは「ニワトリを捧げます。ブタを捧げます。頭、目、首、足、羽……」と、呪文ともいえる歌詞を口にしながら踊りつづける。一回一時間程度のマリを、ときに休憩を入れながら延々とくり返す。あるときはラム酒の瓶をつかんだ男女が交互に縦列になり、聖なる柱アニギを中心に踊りまわりながら、またあるときは生きたニワトリをわしづかみにした人びとが、マラカスを振り鳴らすブジェイを先頭にしてガユネイのなかをうねるように踊り動きながら。

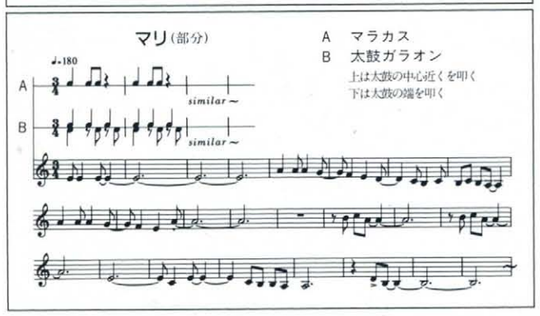
こうしてマリの歌と踊りをつづけていると、親族のなかから目を閉じ両手を前にもちあげ、足もとがふらつきだす者があらわれる。そしてときに一人、またあるときには三、四人もが同時に陶酔恍惚状態にはいり、そして跳びはね、地面をはいまわったりする。こうして自分を失い、普段とはまったくちがった行動をとり始める者があらわれる。祖先の霊が子孫たちに乗り移るのだ。子孫の肉体を借りた故人が、行動し話をする具体的な人格として現世によみがえるのである。

エレラ家のある女性に祖先の霊が乗り移る。彼女は無邪気に跳ねるように踊りだし柱をよじ登り、天井の梁にぶら下がり、太鼓の鼓動にあわせながら体を揺すりだした。次に地面に下りた彼女は「ズボンをもってこい、タバコが吸いたい」と叫び、みずからのスカートを剥ぎ取った。きっと彼女に乗り移った祖先は木登りとタバコが好きな男だったんだろう。彼女にタバコを与えるとおいしそうに吸い、そのうち寝てしまった。

太鼓のリズムが止まり、歌と踊りをやめ、

冨田晃「ガリフナの祖霊信仰」『季刊民族学』73,pp.59-73,1995





【太鼓奏者と楽器】

ドゥグの開始が決まると太鼓奏者の男たちが近隣の村々から集められる。四人一組となり交替で休憩をとりながら、マリを進めるため八人ほどの太鼓奏者が参加する。この仕事は有給で、一回のドゥグで、ホンジュラスの一般公務員の月給の半額ほどを現金で手に入れることができる。またドゥグにおいてブジェイに次ぐたいせつな役割として、親族たちから丁重に扱われる。

ドゥグにおいて使われる楽器は太鼓ガラオンとマラカスだけである。アフリカを起源とするガリフナ太鼓「ガラオン」のうちドゥグ用のものは、ふだん祭りなどで使われるものとはことなり、より大きく、低い音がするのである。

マラカスはカリブ海先住民が神器として、呪術などにつかっていたことに由来する。ガリフナのドゥグにおいてマラカスはブジェイだけがもつことができる。

【アバイマハニとアウマハニ】

アバイマハニ(女唄)とアウマハニ(男唄)は、マリとマリの合間の小休止として歌われる、祖霊を慰める鎮魂歌である。アバイマハニでは女たちが、アウマハニでは男たちが、横一列に並び、大きな円をつくり、小指と小指を絡め、ゆっくりと腕を振り、静かに斉唱する。マラカスや太鼓などのリズム伴奏はともなわない。

歌詞は、

「あなたが逝ってしまって……。夢のなかで母さんはやさしい……、どこにいるの……」

と、悲しく寂しくつづく。

ゆっくりとした四拍子であるが、かなり伸び縮みがあり、細分化されたリズム感もない。短調的、五音階的な旋律であるが、西洋の音階とはことなる独自ものがうかがえる。詩に韻律をつけ、詠ずるかのような歌唱法や、円になり、手をつなぎ歌う姿には、カリブ海の先住民の影響がうかがわれる。

→マリではいけにえのニワトリをつかんだ親族たちが、呪文を唱えながら踊りつづけ、先祖の霊があらわれるのを待つ

↘マリでは女性ブジェイがマラカスを激しく鳴らし、男たちが叩く太鼓ガラオンが低く重く轟く。ドゥグにおいてマラカスはブジェイだけがもつことができる。また、太鼓は普段の祭りなどで使われるものとはことなり、一回り大きく、低い音がする

↓親族の1人に先祖の霊が乗り移る。目を閉じ両手をもちあげ、足もとがふらつき、恍惚状態にはいる。こうして自分を失い、普段とはまったくちがった行動をとり始める。祖先の霊が乗り移るのだ

一回のマリが終わる。そしてしばらくの休憩をとったあと、ふたたび、皆でマリをつづける。次はガルシア家のエバおばあさんの霊が彼女の孫の一人に乗り移る。彼女は地面を苦しそうにはいまわり、頭を太鼓のなかに突っこみながらリズムにあわせて腰を動かしつづけた。そして突然、太鼓の前に座りこみ、皆にさとすように語りだしたのだった。ブジェイが鳴り響いていたマラカスや太鼓を止める。人びとは彼女を遠巻きに囲む。

「おい、イサどうしておまえは結婚したがらない。子どもが欲しい。たくさんの子どもが欲しい。」

皆じっとその言葉に聞き入る。そして彼女はぐったりと地面に倒れこんだ。ブジェイは彼女を抱きかかえ、ディバスに吊られたハンモックに寝かす。人びとはガユネイの内外に散らばりながら、その言葉について話しあう。

こうして祖先の霊が乗り移り、失神し、気を失ったものは休憩所ディバスのハンモックに寝かされる。そしてときをみはからい、ブジェイがラム酒を失神している人の顔に吹きかけると突然、その人は夢から醒めたかのように、目を開け、自我をとり戻す。しかし祖先の霊の怒りにふれた者は、なかなか解放されない。ときには数日間もうなされ、悲鳴をあげつづけることもある。

一回のマリが終わると人びとはガユネイの外に出て一休みする。そして、ガユネイのなかに三々五々もどり、祖先の霊を慰める鎮魂歌アバイマハニ(女唄)やアウマハニ(男唄)を静かに踊り歌う(六七ページ囲み記事参照)。

祖霊に食事を捧げ、眠りにつく

二、三日目

小休止をはさみながら一晩じゅうマリをつづけ、夜が明け、日が昇ると、人びとは太鼓や

↑〈上〉アバイマハニとアウマハニ
いくつかの曲が伝わるが、それぞれの代表的な一節を記譜してみた。ここでは便宜上、小節線のある5線上に記譜したが、ゆっくりとした4拍子ながらもリズム割りはかなり伸び縮みしていて、細分化したリズム感も存在しない。旋律は短調的、5音階的であるが、西洋音楽のそれとはことなり、ガリフナ独自のものがうかがえる

↑〈下〉マリ
4つの太鼓ガラオンとブジェイがもつ1組のマラカスによるリズム伴奏をともなう。ブジェイと親族たちとのコール・アンド・レスポンス(掛け合い)による歌によっていくつかの旋律があらわれ、それぞれ何回も繰り返される。やはり、いくつかの曲が伝わるがいずれも3拍子である

採譜協力・横井　恵

→祖先の霊を慰める鎮魂歌アバイマハニはマリとマリの合間の小休止に歌われる。女たちが、横一列に並び、大きな円をつくり、ゆっくりと腕を振り、悲しく寂しい歌詞を静かに斉唱する

マラカスとともにガユネイの外に出て、村の中央にある十字架の前でマリをおこなう。朝八時ごろ、このマリが終わると親族たちは、いったんそれぞれの家へ帰り、祖先の霊に食事を捧げるアダダグニの準備をする。

このアダダグニは参加するそれぞれの親族集団で別々におこなわれる。ドゥグ二日目の昼にはエレラ家が、三日目の昼にはガルシア家が、ガユネイの中央に並べられた四つの机にさまざまな食事を四段に盛るのだ。ドゥグにおいて四は特別神聖な数字だ。四つの机、四段に積まれた食事、四つの太鼓、四人の漁師、四角いガユネイに四つの出入口、供物のニワトリは四羽ずつ殺され、ドゥグは四日間おこなわれるのだ。

供物であるニワトリを殺すには特別な作法がある。ガユネイのなかでブジェイを前に、太鼓奏者の男たち四人が、それぞれ手に生きたニワトリの羽をつかみ、輪になる。そして男たちは歌を歌い、それにあわせてニワトリを左右に揺らし地面に引き摺る。そしてその歌が終わった瞬間、おもいっきりニワトリを地面へ叩きつけるのだ。息絶えたニワトリは女たちに渡され毛がむしられ料理される。

ブタはマリの小休止のあいだにブジェイにより殺され、村びとたちにより毛をはがされ、内臓をぬかれ、一昼夜ガユネイの四隅の梁に吊るされたあとに料理される。

朝一一時ごろになると、ガユネイに集まったエレラ家の人びとは、ブジェイから祖先の霊へ捧げる食べものを一人ずつ受取り、それをバナナの葉で覆われた机に丁寧に置いていく。まず、マニオクイモからつくるせんべい状のカッサベ、そして蒸し焼きにしたニワトリとブタの肉の塊、ココナツパンとつづき、そのあとは大鍋からそれぞれの料理が、親族たちがもつ皿に次々によそられていく。その

冨田晃「ガリフナの祖霊信仰」『季刊民族学』73,pp.59-73,1995

とき親族たちは各人が一皿につき一・五レンピーラ(約一五円)ずつ、ヒョウタンのお椀に納め、それはドゥグの経費としてグリにある祭壇に供えられ、ブジェイが管理する。

家族は一人一人「おばあさん、もうお怒りをおさめてください」などと祈りながら、祖先の霊へと食事を捧げる。それは用意されたすべて料理により、四つの机全体が四段の皿で盛られるまで繰り返される。この大量の食事は、数時間のあいだそのまま置かれる。

ガユネイに食事が並べられ、祖先の霊が食事をしているあいだ、エレラ家のなかで、もっとも強くたくましい青年と若くて美しい娘がブジェイにより着飾られる。このドゥグの正装には何枚ものスカーフが使われる。スカーフがふたつつなげられ、それが二組、左右それぞれの肩からたすき掛けにされる。腰にもスカーフがまわされ、首には貝殻でつくられた首飾りが掛けられる。青年の股にはふんどしのようにスカートが結ばれ、娘のほおや口には紅がさされる。そして朱色のアチョテの粉が水にとかされ、若者と娘の額、両手の甲、両足の甲に十字が描かれる。

そのあと休憩所のディバスではハンモックが天井の梁に巻かれてかたづけられ、そこで正装した一組の男女を中心に、エレラ家の親族全員により鎮魂歌アバイマハニが歌われる。このアバイマハニはマリの小休止におこなうのとはことなり、男女いっしょにおこなわれる。ガルシア家の人びとはその間、ガユネイの内外で休んでいる。

二時ごろ、ガユネイに盛られた食事が片づけられる。この机に並べられたさまざまな料理は祖先の霊のものであって、親族たちがそれを食べることはできない。しかし、ドゥグ参加者への食事の準備などの手伝いをしている村びとたちだけが、ブジェイから一塊の肉を貰い、家へもちかえることができる。そして、残された大量の食事は、大きなたらいにあけられ、バナナの葉で蓋がされ、ドゥグの最終日までガユネイの片隅に置かれる。

三時ごろ、マリが再開される。小休止をはさみながらもマリは延々と徹夜でおこなわれる。

三日目の朝には二日目と同様に八時ごろマリが終わり、昼ごろになると今度はガルシア家の人びとにより、祖先の霊へ食事が捧げられ、アバイマハニが踊られる。

四時ごろになるとガユネイがヤシの葉でできたほうきで掃除され、二晩徹夜で踊りつづけた両家の親族たちは各人がガユネイのなかにハンモックを吊り、ドゥグ最終日の四日目までともに眠る。これをアルムグニとよぶ。

祖霊が満足したか否か、炎にきく

四日目

ドゥグの最終日、四日目の朝4時ごろ、人びとは目を覚まし、アグニバラウにとりかかる。これは祖先の霊を海にみおくる儀式である。

ガユネイでは皆が寝ていたハンモックが片づけられ、天井に祖先の霊に捧げられるために吊られていた篭と船型が降ろされ、ガユネイの中心にある神聖な柱のアニギのまわりに並べられる。さらにアダダグニで供えられた大量の食事もアニギのまわりに集められる。そして祖先の霊に捧げられていたこれらの供物に、ブジェイは口からラム酒を吹きかけ、清める。

次にブジェイにより、ドゥグの進行をみまもってきたムアが取り払われる。ブジェイは指先をアチョテの朱色と薬草のエキスによる褐色の染料に浸し、土の固まりであるムアに格子字の模様を描く。そして、このムアを祖霊が乗り移った親族の一人が着ていた衣服でたいせつに包む。

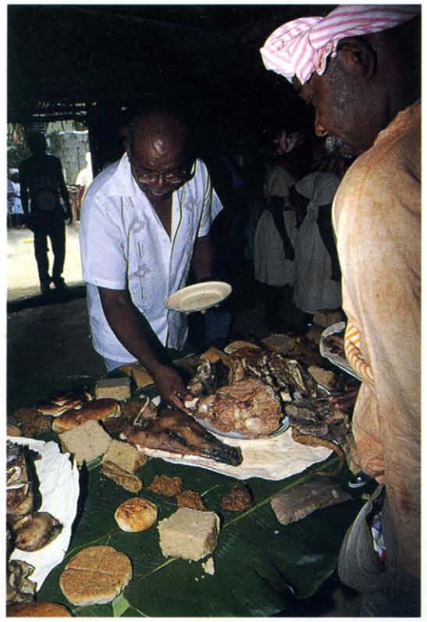
夜が明け、外が白みはじめると太鼓が鳴りだし、親族たちは柱アニギをまわりながら踊りだす。ブジェイによりエレラ家のムアは、エレラ家を代表する若き男の頭に、ガルシア家のムアは、ガルシア家を代表する娘の頭に大切に乗せられる。また船型やアダダグニで祖先の霊に捧げられた料理が、たらいごと親族たちの代表の頭に担がれ、親族たちの一人一人にはガユネイの天井から降ろされた篭が渡されていく。

【食事】

ドゥグのあいだの食事は参加者が食べるものと、アダダグニにて祖先の霊への捧げものとして準備されるものとがある。

参加者が食べる食事も、アダダグニで準備される食事もガリフナにとって特別なものではないが、アダダグニで祖先の霊のために準備される食事は、できるかぎりの量と種類が求められる。ブタ、ニワトリの肉をはじめ、魚、カニ、貝なども煮たり焼いたりされ料理される。アダダグニにはこれらの肉類のほかにもありとあらゆる料理が準備される。ガリフナらしいものとしてマニオクイモからつくるせんべい状の主食カッサベ、マチュカというバナナを臼でついた餅状のもの、バナナを擦って葉にくるみ蒸しあげたナカタマル・デ・バナノ、ココナツミルクがはいったパンなどがあり、ほかにコメ、スパゲティー、ケーキ、豆の煮物などがある。

これらの料理は大鍋ごとガユネイにもちこまれる。またアダダグニで食べものが並べられた机の下には砂がまかれ、その上にロウソクが灯りココナツ、ラム酒、ヒユ、ビール、コーラ、コーヒーといった飲みものが並べられる。ヒユとはマニオクイモからカッサベをつくるときにできた粕からつくるジュースで、ドゥグに参加する人びとの喉の乾きを癒すためにも大量に準備される。



↑〈上〉親族は1人1人「おばあさん、もうお怒りをおさめてください」などと祈りながら祖先の霊へと食事を捧げていく

↑〈下〉4つの机に食事を盛った皿を4段に並べる。また机の下にはロウソクが灯り、ココナツ、ラム酒、ヒユ(マニオクイモからつくるジュース)、ビール、コーラ、コーヒーといった飲みものが並べられる

↓祖先の霊に食事を捧げるアダダグニでは、机が4つガユネイの中央に並べられ、バナナの葉で覆われる。そしてカッサベ、ココナツパン、ナカタマル・デ・バナノ（バナナを擦って葉に包んで蒸しあげたもの）と並べられていく

↑ブタは祖先の霊への貢物としてブジェイによりナイフで殺され、村びとたちにより毛がはがされ内臓をぬかれる。そして一昼夜ガユネイの四隅の梁に吊るされたあとに解体、料理される
←ドゥグのあいだに親族らが食べる食事は、村の女性たちにより料理される。ココナツの殻を燃料にしたドラム缶利用の天火で、ココナツパンを焼く

冨田晃「ガリフナの祖霊信仰」『季刊民族学』73,pp.59-73,1995

↓〈上〉ドゥグ最終日、空が白みはじめると太鼓が鳴りだし、親族たちはアニギを回りながら踊りだす。ガユネイの天井に吊るされていた船型や篭、アダダグニで祖先の霊に捧げられた料理のはいったたらいがブジェイから親族1人1人にわたされていく

↓〈中〉海岸では丸木船がラム酒で清められ、それに祖先の霊に捧げられたさまざまな供物が乗せられる。太鼓とマラカスが響くなか、漁師たちは丸木船を沖へと漕いでいく。そして海岸から充分に離れたところで、これら祖先の霊への捧げものが海へと返される

↑ブジェイはマラカスを一振りごと丁寧に鳴らし、一組の男女が海のなかへ後ろ向きに進んでいく。海面が顔にせまると、ブジェイの合図で、男女は頭上のムアをうしろに投げ、全身を海中に沈める
→太鼓奏者たちも、丸木舟に乗った漁師たちが、祖先の霊への捧げものを海へと返し、無事アグニパラウが終わるかと心配そうにみつめている

↑ドゥグの進行をみまもっていたムアが海に投げこまれると同時に、砂浜でみまもるすべての親族が海へ飛びこみ、海水をかけあう

冨田晃「ガリフナの祖霊信仰」『季刊民族学』73,pp.59-73,1995

青白い炎がブジェイが揺らす机の上から落ち地面にひろがる。そして机の上の炎は青白い光を幻のように強くした

日の出とともに人びとは、マラカスを鳴らしながら歩くブジェイを先頭にガユネイの外に出る。つづいて太鼓奏者、ムアをもった一組の男女、そしてかいをもった漁師たちがつづき、そのあとに親族たちが篭や船型そして、たらいにはいった食事とともに外に出る。マラカスや太鼓が響くなか、人びとは海岸へと踊り歩いていく。

カリブ海にこのドゥグが始まって四回目の朝日が昇る。海岸では丸木船がラム酒で清められ、それに先祖の霊に捧げられた大量の食事と、ガユネイの天井に吊るされていた七二個の篭、そしてガルシア家、エレラ家それぞれの丸木船の模型が乗せられる。太鼓が響きわたるなか、漁師たちは丸木船を沖へと漕いでいく。そして海岸から充分に離れたところでこれら祖先の霊への捧げものが海へと返される。

漁師たちが無事、聖なる任務を遂げたことを確認すると、海を向いたブジェイは、一組の男女と向きあい、男女それぞれの頭にかつがれたムアにラム酒をかける。ブジェイはマラカスを一振りごと丁寧に鳴らし、男女は後ろ向きに海のなかへはいっていく。海面が男女の顔まできたとき、ムアがまうしろに投げられ、頭を海中に沈める。この瞬間、砂浜でみまもるすべての親族たちが海へと飛びこみ、海水を掛けあう。

こうしてアグニバラウが終わり、ガユネイに戻ると、ブジェイが親族たちを聖水で清め、ドゥグの最後であるアグダハニの儀式を迎える。

アグダハニとはドゥグの成果を祖先の霊に問う儀式だ。もし祖先の霊の怒りが、まだ取り除かれてないとされたならば、親族たちはさらにドゥグをつづけなければならないのだ。

聖殿ガユネイの中央に、ブジェイの前に机がひとつ置かれ、人びとが心配そうにとりまいている。机の下には砂が敷かれロウソクが灯っている。ブジェイがラム酒をその机の上に注ぎ、マッチで火をつける。机を左右に傾け炎がこぼれ落ち地面にひろがる。次は前後に傾ける。机の上の蒼白い炎は一瞬勢いを増し、消えていった。誰一人として口を開く者はいない。皆、固唾を飲んでみまもっている。ふたたび机にラム酒が注がれ、火がつけられる。青白い炎がブジェイが揺らす机の上から落ち地面にひろがる。そして机の上の炎は青白い光を幻のように強くした。

「祖先の霊は喜んでいます」。ブジェイが告げる。ファナが抱きつく。ブジェイのジョウバは涙ぐんでくる。エレラ家の人びとも次々に

→「祖先の霊は喜んでいます」。ブジェイが告げる。人びとがつぎつぎにブジェイに抱きつき、感謝の意を告げる。ブジェイの目は涙ぐんでいた

それまでの重く苦しいドゥグもアグダハニが無事終わるとともに、あかるくなごやかになった。たらいで海から水が運ばれ、サンバイというとても楽しい太鼓のリズムにのせて人びとは海水を無邪気にかけあう。祖先の霊が宿っていたガユネイを清めるのだ

ブジェイ、ジョウバに抱きつく。ファナは「足の痛みはどこかにいってしまったわい」とはしゃいでいた。そしてガルシア家、エレラ家ともガユネイにいたみんなが抱きあって喜ぶ。

それまでの重く苦しいドゥグもアグダハニが無事終わるとともに、あかるくなごやかになった。たらいで海から水が運ばれ、サンバイというとても楽しい太鼓のリズムにのせて、人びとは海水を無邪気にかけあう。祖先の霊が宿っていたガユネイを清めるのだ。

そのあとブジェイにより特別なカクテルがつくられ、振舞われる。このカクテルはニワトリの卵を殻ごと潰し、バニラエッセンス、ビール、コーラ、ラム酒を加えかき混ぜたものだ。飲んでみるとなぜか卵の殻はなくなっている。一人ずつブジェイからカクテルを受け取り、ロウソクのもとで清めてから飲む。ドゥグのすべてをみまもっていたイエス・キリストに感謝するのだ。

カクテルを飲んで少し酔いがまわるとフェグが始まる。フェグとはガリフナたちのパーティーだ。太鼓はドゥグ用の大きなものから、村祭りで使うものに換えられる。プンタ、パランダ、ウング・ウング、グンチェイとさまざまなリズムが叩かれ、人びとは楽しく踊りつづける。

こうしてドゥグは終わった。

その後ファナの足は順調に回復しているようだ。イサも結婚を考えているらしい。最近エレラ家では大きな宝くじがあたった。

本文中の家族名、個人名は仮名にしてあります。

参考文献

ガリフナの音楽については、拙稿「ホンジュラス　ガリフナの旋律」『季刊民族学』六七号　一九九四年
日常生活については、拙稿「ガリフナの衣食住」『季刊民族学』六九号　一九九四年
を、それぞれ参照ください。

←ブジェイにより特別なカクテルがつくられ振舞われる。１人ずつブジェイからカクテルを受け取り、灯明のもとで清め、イエス・キリストにドゥグの成功を感謝する

カクテルを飲んで少し酔いがまわるとフェグが始まる。フェグとはガリフナたちのパーティーだ。太鼓やマラカスが、ドゥグ用から、村祭りで使うものに換えられる。プンタ、パランダ、ウング・ウング、グンチェイとさまざまなリズムが叩かれ人びとは楽しく踊りつづける

冨田晃「ガリフナの祖霊信仰」『季刊民族学』73,pp.59-73,1995